
平和のタクトと怠慢青年

鑑賞さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和のタクトと怠慢青年

【Nコード】

N2738P

【作者名】

鑑賞さん

【あらすじ】

現代からどれほど月日がたったであろうか、科学の進歩とともに、オゾン層の破壊や地球温暖化といったあらゆる環境問題はすでにたいたことのない問題となりつつある世界、そしてある時から、この世界は新たなステージへと歩みを進め始めた。

人間の脳、これまで解明されることのなかった人間の最もなぞ多き器官、ある一説では、人間の脳は数パーセントの力しか使っていないというが、それは俗説として破棄されつつある、それは最近の脳科学が異常に発展したためである。

ある学者が言う、人間の脳は百パーセントの力を使い、人体と言う巨大な物を動かしている、そして、その脳があるとき何らかの箍を外し、百数パーセント以上の力を使用した場合、人間は始めて、特異能力と呼ばれるまったく新しい、科学者にとって甘美で至福な謎が生まれるのだ、と。

特異能力、それは魔法であり超能力、太古の昔から受け継がれてきたオカルトとはまさにこれであり、現代の奇跡とはまさにそれである。

新たなる世界へと誘う箱舟がゆつくりと動き出すときがついにきたのであった。

怠惰の始まり（前書き）

初めて書かせていただきます、うまく出来るかどうか不安ですが、良ければご教授ください！

なお、この世界はすべてふいくしよんでしか出来ていません、国や地域の名前と関連性や因果関係などはまったく無いことを前提といたします。

怠情の始まり

浦崎表麻^{うらいまきひょうま}は平和を好んでいる、何の争いもいざこざも起きぬ、ただ風の流れに身を任せるような自然な平和が、彼にとってこれ以上無い幸せな時間であった。

しかし、今日はいにく日本の東南から笑ってしまうほど大きな台風が日本に接近中のため風が強い、明日からあさってにかけては日本に上陸し、気分が根こそぎびしょ濡れになるほどの大雨を降らせてくれることであろう。

科学という高度な技術を使っても天候は読めない、気候を完璧に読むことが出来るということは一種の予知と言っても良いであろう。表麻は学園の屋上に取り付けてある天体観測場と言う四角い建物の上に寝転がり、風を感じながら口端に薄っすらと笑いを浮かべている。

ああ、平和だなと、小さくつぶやいたのだが、それに答えるように誰もいないはずの屋上から第三者の声が表麻の耳に届いた。

「あんたあゝ！　こんなところで昼寝してるたぁいい度胸じゃない！　授業サボって何してるかと思えばそれか！　あんたにはそれしかやることがないんかいボケェ！」

声というよりは怒号に近い、表麻はビクリと反射的に体を起こすと、いつの間にか目の前に、オーラという見えない物により髪が逆立ち、目は裂けてしまっているのではないかと思うぐらい見開いている一人の女子が立っていた。

「うわっ、ゆっ、夕香？」

彼女の名前は氷野^{ひの}夕香^{ゆづか}、淡い青の長髪に漆黒に近い紺青の大きな瞳を持つ飛び切りの美少女、夏休みも間近とあってか、半そでのワイシャツと短めのスカートからは真っ白な手足が除き、時折降り注ぐ太陽光をきれいに反射する。

と、そんな悠長な説明をしているほど、表麻の心理状況はよろし

くない、今は、追い詰められた袋のねずみといったところか、首筋に嫌な汗を感じながら表麻はにっこりと営業にも使えそうな社交辞令スマイルで少しずつ後ろへと足を使い下がろうとした。

其の時、パキイと普段の生活ではまず聞かない音が響く、途端表麻は金切り声を上げる。

「冷った！ いや、ちよつと待つてくださいよ夕香さん！？ いくら猛暑が続くからって人の足首から下を凍りつかせて地面に接続させるのは拷問の中だけにしてください！」

「今から、あたしの言うことが聞けないのだったら、あんたの足を少しずつ凍らせていくわ、どこまであんたの足の細胞は酸素なしで生きていけるか見ものよねえ？」

「わかりました、言うことを聞きますから頼みますからそれだけにご勘弁！」

「じゃあ、今から授業に出るわね？」

「出ます、出させていただきます！」

表麻は目じりに涙を浮かべながら懇願するようにそう言った、それを見た夕香はため息をつく、表麻のそばにしゃがみ、凍った足を撫でる。

すると、まるでうそであったかのように表麻の足を凍りつかせた氷が消えた、冷え切った足首を摩りながら表麻はホッと安堵のため息をつく。

「まったく、あんたはいつもいつも授業をサボってばかりで、代表委員になんかなるんじゃないやなかったわ」

夕香は額に手をつきながら、呆れたように表麻を睨む、それを見た表麻は体を硬くする。

「そんなんだから、あんたはいつまでも下位なのよ、そのところ自覚してるわけ？」

「……まあ、一パーセントぐらいは？」

「特異能力者養成施設、九十九学園、この日本中探してもこれと同等につりあう学園なんて数えるくらいしかないわ、それに合格した

のだから少しは努力をしなさいよ、力が無いなら無いなりに」

この世にある特異能力、脳の力を酷使する際に発せられる力、または弊害と言われているが、それを養成し世に送り出す学園は数々ある、その中でも有数の学園、四年制をとる珍しい九十九学園、それは誰もが憧れ手を伸ばしても届かぬ高嶺の学園なのだ。

表麻はそれに難なく合格した、もとより九十九学園は学力重視なのではなく、特異能力が重視されている、特異能力を調べ、また、脳内スキャンといわれる、特異能力が開花していない者が今後開花するかどうか、した際にはどの程度のランクなのかを調べ、それを踏まえてうえで、中位、上位以上の場合合格となる、しかし、本人にその脳内スキャンの結果は知らされてはいないのだ、聞きたいものには聞かせてはくれるが、皆、己の能力には自信がほしい為、あえて聞かない生徒が多い。

その中で彼女は脳内スキャンを受けなかった、すでに能力が開花し、それが中位特異能力者と認められたためだ、先ほど見せたように空気中の水分の振動を極力押さえ温度を下げ凍らせる氷点下という高度な特異能力を持っている。

彼らはまだ初々しい高校一年、しかし、夏休み前にはほとんどの生徒が能力の開花（もとより才能はあるためキツカケがつかめればどんどん伸びる）し、今ではクラスのほとんどは中位特異能力者となっている。

しかしだ、ここにいる浦崎表麻は違う、周りとは圧倒的に遅れをとっている、特異能力検査と呼ばれる中間検査と同じような扱いのテストがあるのだが、表麻はいつもギリギリのスレスレで赤点を免れている。

「……そうだな、努力、か」

一人空言のように表麻は拍子抜けしたような間の抜けた声でそう呟いた。

「なあ、夕香」

と、不意に表麻は彼女の名を呼ぶ。

「何よ」

「俺ってさ、才能あると思う？」

真剣な面持ちで夕香の顔を見る、普通のものなら、才能はあるに決まっていると相手に自信をつけさせるための言葉をかけるのだが、「このまま行けば、あなたの才能は枯れていくだけだと思うわ、それは最初から無いと同じよ」

彼女は無情に言葉を突きつけた、それを聞いた表麻は一瞬驚いたように目を見開くと、フツと雪が溶けたかのように柔らかく笑う。

「そっか、俺は皆にそう見られてるのか……」

少し淋しそうに、そしてほんの少し嬉しそうに苦く微笑む。

「さあ、行きましよう、授業終わっちゃうわよ」

「へいへい」

夕香がそう言っ、観測上の階段から降りていく、夕香の姿が見えなくなると表麻立ち上がり、学園から見渡せる町の風景を見つめる。

「風が、強いな」

そう言っ、表麻は夕香の後を追った。

授業の途中で入ってきた途端、このクラス1・Eの担任、宮野柚木^{みやの ゆき}の暗い心底震えるような怒り声が表麻に向けられた。

「コラア！ 貴様は何をやってるのだ！ 授業をサボるほど出来た生徒かお前はあー！」

すみません！ と反省の色を上手に浮かべ、席へとつく表麻、宮野は少し表麻を睨むが授業を中断する気は無いらしい、昼休み職員室に来いとだけ言っ、授業を再開した。

退屈な授業が終わりお昼時、机の上でぐだっている（ほかの授業を抜け出そうとしたが夕香に阻止され疲労困憊状態）表麻の頭に硬

いものとチョンとあたる、表麻は目を細めたまま顔を上げると、そこには短めの茶色の髪をした可愛らしい少女が愛着のある顔でニコリと笑って立っていた、それを見ると表麻は笑い返す。

「来生か、どうした？」

「お昼、どうするの？」

おっとりとした声で空音来生そらおとねは聞く、彼女は表麻が小さいころからの幼馴染というやつだ、中学時代は距離をとっていたのだが、高校になり知らない人も多い中同じクラスだったのを期に最近ではよく話をするようになってきている、表麻自信もそれについては少しホッとしているところだ。

「メシか？ そーだなあ……パン」

九十九学園にも購買部は存在する、種類は多種多様で中には餡子焼きそばパンと言う完全に罰ゲームを前提として出しか作られていないゲテモノ惣菜パンなども売られている。

「そういうと思って、お弁当作ってきたんだけど、食べる？」

「……マジか？」

「うん」

何の恥ずかしげも無く来生はニコリと微笑んだ、がそれを聞いた周りの男子生徒の視線が痛い、運が悪ければ特異能力が飛んでくる恐れもある。

だが、ここで断るのも何か悪いと思い表麻は首を縦に振る、それを見た来生の顔が輝かしいほどの笑顔になるのを見るとさらに周りから威圧的な視線が入り乱れ、耳の隅でカッターナイフの戦慄じみた音が聞こえた気がしたが、表麻は聞こえない振りを決め込んだ。

「おっとあ？ 表麻が弁当なんて珍しーなあ」

来生の作ってきた弁当を突きながら他愛も無い世間話をしていると急に声がかかり、表麻の隣に人影が落ちた。

脱色したクリーム色の髪にそれに似合わない茶色い瞳の青年、表麻の中学時代からのマブダチ、町利利峰まちががとしみねである、脱色したのは最近だ。

利峰は先ほど買ってきたのであろうミルクティーを片手に表麻の弁当を覗き込み、来生の弁当を見ると首をかしげた。

「んお？ 随分と来生ちゃんの弁当と表麻の弁当が酷似していないかーい？」

「そうだよ、私が作ってきたの」

「へえそうなのかい、来生ちゃんってお弁当上手だな……って、表麻これは俺との血の契約を破るということかー！？」

今まで仮定であつたところを真実にされ、平静を保つのが限界に来たのか利峰は喰いかかるように表麻の首に腕を回す。

「おまえと血の契約を交わした覚えは無えだろうが！」

「その馬鹿二人、昼時ぐらい静かに出来ないのかしら？」

ギヤーギヤーと騒ぐ二人の前に冷たい視線を送る夕香の姿。

「お昼は騒ぐ時間だらうい？ 湿気た教室ほど面白くないものは無いってーの」

「そう、じゃあ残念だけど、表麻、あんたは職員室に早く行きなさい、御呼ばれしてるんでしよう？」

「あゝ、そうだったな」

表麻はばれたかと小さく呟くと席を立つ、そしてチラリと食べかけの弁当を見た後に来生を見る。

「わりいな来生、後で全部食うからよ」

「無理しなくて大丈夫だよ、いつてらっしやい」

表麻が席を立ち、教室から出て行くその背後で

「じゃーよー来生ちゃん、俺と話しようぜ」

「いいよ、何について？」

「そうだな、俺と表麻の絡みを邪魔する嫉妬深い代表委員について

……なんていいと思うんだけどなー」

「なんですってー！」

と言うとてつもない平和な喧騒が聞こえたのだった。

カーテンが閉められた薄暗い部屋の中、高級デスクに座り薄暗く
灯る昔風のランプの光の中で、書類に目を通す一人の男がいた、髪
の毛は色が落ちて白髪で、あごには大そうな顎鬚が蓄えてある、九
十九学園校長、平賀源内である。ひらがけんない

彼は今年入学してきた新入生等の特異能力について生徒一人一人
のレポートに目を通して、彼の頭にはすでにこの九十九学園生
徒、総合にして千人近い生徒の特異能力とその成長について記憶し
ている、ご老体とは思えぬほどのすばらしい記憶力を持つ方だが、
彼の記憶方法はいたって簡単である、覚えるためには何でも印象が
大事で、人間は忘れる生き物、しかし、忘れられない思い出も少な
からずあるであろう、告白をしたときや悔しい思い出を残したとき
ほど記憶に残らないことは無い、むしろ忘れたいのに忘れられない
くらいなのだ、それを彼は上手く利用する、生徒一人一人になるべ
く印象を植えつけるようにしている、彼は温和で優しくうだなど、
好印象でも悪い印象でもかまわない、ゆえに平賀源内のすごいこ
ろは記憶力などではなく記憶しようという心意気である。

それに加え記憶に大事なことは重複であるが故に、彼はこれでこ
のレポートに目を通すのは二十回目である、その根性も見上げたも
のだが。

ふと、彼のレポートを捲る手が止まった、平賀源内は目を細め
ると、微笑にも嫌悪にも似た表情で一つのレポート用紙をじっくりと
見る、そして小さく呟いた。

「わからん」

そのレポートに添付されている写真は立体の三次元フィルムが貼
り付けられていて、角度をかえるごとに横顔や下から見上げたとき
の顔の形までわかるようになっていて、最新鋭の技術である、その三
次元フィルムに真剣なまなざしで移っている一人の青少年の顔、少
し癖のついた長めの黒髪に、真つ黒な黒色の強い瞳、純日本人とい

うほど彼の顔かたちは日本と言う言葉がしつくり来る、と同時に、人ごみにまぎれて過ぎ去れば数秒で彼の記憶からも消えてしまいそうなほど、平凡でもある。

平賀源内の言葉、わからんはこの平凡でいかにも、主人公になどなれそうも無い青少年が、この九十九学園に合格したことも含めた言葉であつた。

九十九学園の試験内容においてこちら側が用意できるのは試験問題だけである、特異能力測定検査や脳内スキャンなどは国が認めた機関でしか使用が出来ないため、そちら側に九十九学園は干渉することがほとんど無い、しかし、ここに入学さえしてくれば、こちらの技術を総動員して教え子を育て上げることが出来るのだ、しかし。

平賀源内は写真を眺める、写真に写る浦崎表麻の表情は変わるこ
とが無い。

彼はこの学園に合格した唯一の落ちこぼれである、そして彼のレポートには重要な特異能力レベルが書かれていない、開花後の期待も見込みありと言う曖昧なものである。機関に問い合わせるものの返事は茶を濁すような回答ばかり、だが彼は合格なのだ、試験では赤点をギリギリで掻い潜り、授業はサボってばかり、客観的要因を追求すれば彼は下位特異能力者。

「ふん」

平賀源内はそのレポート用紙をまるで良くない点数を取ったとき
の高校生みたいに、グシャグシャに丸めると、近くのゴミ箱に投げつけた、カコンと気持ちのいい音が響きその紙くずはゴミ箱の中に納まった。

コッテリと油分まで絞られた表麻はぐったりとしながら重い足取

りで教室のほうへと向かっていく。

彼の平和はここに来て壊されてばかりである、何が面白くてこんな学園に入ってしまったのだろうか、表麻は時々思いながらため息をつく、と、ため息と同時に目を閉じたためか前方から歩いてくる女子生徒とぶつかってしまった、肩と肩同士のためそれほどでもなかったが。

「あ、ごめん、大丈夫か？」

「あ……………はい、大丈夫です」

妙に間の空いた受け答えに表麻の頭にはてなマークが浮かぶ、すると彼女の隣にいた女子生徒が。

「ね、いこ」

「う、うん」

その子に引つ張られるように彼女は自分の横を通り抜けて行く、なんだ？　と思いつながら表麻はさして気にする様子も無く歩こうとしたが、不運にも小声が彼の耳に届く。

（さっきのあれって、浦崎表麻って奴でしょ1-Eの？）

（そうだけど、どうかしたの？）

（この学園で一番の落ちこぼれ何だって、笑っちゃうよね、夏休み前なのに下位のままとか）

（ちよ、ちよっと、聞こえるよ）

「はあ」

そんな話を聞きながら表麻はもう一度深いため息を吐く、言わせておけば良いのさあんなもの、と表麻は勝手に結論付け、頭をかこうとした手に目が行った。

幸か不幸かこの体に宿る特異能力。

（こんな平和と無縁な能力なんざいらねーっての）

昔は核兵器などが点在した物のそれを行使しようなどと狂った輩等はいなかった、そんなものを地球の同じところに三発ぶつ放した瞬間地球上の生命と言う生命は根こそぎ絶滅しかねないからだ、しかし、特異能力はそれを簡単にひっくり返したのだ、上位特異能力

者、特異能力者達のトップに立つ存在、上位と言ってもその中でさらにA〜Eまで五つに細かくランクが分かれている、中でも上位特異能力者のAランクは核兵器すらも凌駕する能力の持ち主だと言われている世界でも数は限られている、この学園にもランクAの上位特異能力者がいるとかいないとか……。

そのような兵器並みの特異能力を日本は多く抱えているため、他の国から毎日のごとく干渉されているのである、日本政府はもともと憲法九条に則り、戦争など無駄な争いは生まないとして、特異能力者を戦場に狩り出すことなど無いと思うが。

では何故特異能力の為の学園や大学があるのか……それは勿論争いを回避するためである。

自衛と言う言葉がある、あくまで攻撃を受けなければこちら側からは何の圧迫もかけない、しかし攻撃を受けた際は全力でそれを防ぎ、さらにこれほど強力な人材があるのだから攻撃をしないほうが得策ですと、特異能力者を多く輩出することで隠喩として世界に見せ付けているのである。

しかし、その所為で世界とのバランスも非常に不安定になってきている、アメリカとロシアはたまた中国などの勢力は、次第に日本と言う島国に勢力図をいつかは塗りつぶされてしまうのではないかと、不安を抱え込んでいのだ。

そのような争いを生むこの特異能力、表麻は非常に不愉快に感じているのだ。

もともと、平和を酷く好む彼だからこそ……。

と、表麻が自分の教室に戻ろうとしたときだ。

教室でなにやら怒号が飛んでいる、しかし、出て行くときの平和的な争いではない、声にどこか殺気が混じっている。

声を良く聞くと、そのうちの一人は夕香だということがわかる、それに声を返しているのは聞いたことはあるのだが、名前を覚えていない男子生徒二名だと思われる。

表麻は少しばかり表情を曇らせながら教室の扉をあける、いつも

より扉が響かせる音が大きく感じられた。

「……………」

教室に入ると、まるで砂漠の昼夜のように怒号がピタリと途絶え、鳥肌が立つほどの冷たさが教室を支配した。

表麻が予想したとおり、争っていたのは夕香と男子生徒二人、だが表麻が入ってきた瞬間にその三人は表麻を見るとばつの悪そうな顔をしていた。

「？　どうかしたか、俺の顔に何かついてる？」

「別に、なんでもねーよ、行こうぜ」

二人の男子生徒は表麻から強引に視線を外すと前の扉から出て行く、教室内は少しずつだが話し声が戻りつつある、表麻はこちらを見続けている夕香に視線を移した、夕香は地面をへこませかねない勢いで此方に歩み寄ってくる、自らの危機を感じた表麻は体を硬くしながら。

「え、えーっと夕香さん？　何かあつ

」

「放課後……少し付き合いなさい」

すれ違いざまにそう言われ表麻は言葉を飲み込んだ、夕香はそのままどこかへと行ってしまい、詳しいことを聞くことが出来なかった。

表麻は首をかしげながら自分の席へと戻り。

「利峰」

「なんだーい？」

呼んでからすぐ、彼は表麻の机の前に立つ。

「何があつたんだ？」

「まあ……簡潔に言っちゃうと、だ」

少し躊躇うように利峰が口を動かす。

「お前のことについてなんだよなー」

逃走戦闘（前書き）

いやーテストが近いので書くのは控えようと思ったのですが、書いてしまいました、まだ物語りは進行の一途すらたどっていません、少しずつ考えていけたらいいなと思います、なお、この話はふいくしよんのため、国や地域名や新たに見るであろう言葉などに因果関係や関連性は一切ございません。

逃走戦闘

授業もすべて終わり、真上にあった太陽も少しずつ傾き始め、広い校庭も校舎もすべてがわずかにオレンジ色を含む光に彩られ始めている、表麻はそんな景色を見ながら一人の女の子の後ろをついてきている。

「おい、夕香、俺をどこに連れて行く気なんだよ」

「いいから、黙ってついてきなさい」

そういいながら夕香は歩く歩幅を広げていく、表麻はため息をつきながら、彼女の後姿を見やる。

俺のことです？

表麻は思い出す、利峰に言われたことを。

追求しようとした表麻を見て、利峰は少し心苦しそうに表情を歪めると、表麻の耳元でそつと囁く。

「あの男子生徒二人いただろ？ あいつがお前のことを悪く言ってたのを俺たちと話してたあいつが聞いてなー、一言物申したところからあれが始まっちまったんだよう」

「あいつが、か？ どうして」

表麻は少し驚いたように目を丸くした、まさか人の足を凍らせいで拷問するぞと脅す脅迫代表委員が、まさか自分のために口論をするとは思わなかったからだ。

「……………あー、あれだ、あいつ代表委員だろう？ そう言うのは許せねーんだと、俺は思うんだよなー」

少し眉を潜め利峰は言う、表麻は彼の態度に少しばかり気にはなる、しかし。それを考える前に利峰が口を開く。

「んでー？ すれ違いざまに、お前は氷野に何を言われたんだい？」

「放課後付き合えたと……………わけわかんねーなーったく、なあ利峰、お前どう思うよ、っつーか、何でお前はさっきから不自然とご機嫌斜め？」

先ほどから妙に表情が鋭い。

「利峰さんは我慢の限界です」

「はい？」

その言葉と同時に利峰が表麻の首に腕を絡ませ、スリーパーホルドという名の締め技を繰り出した。

「表麻、お前のことが憎らしくてたまないぜい！」

「ハア！？ 何が、何がだよ！？ テメエ利峰いきなり締め技かまして来るたぁいい度胸してんじゃねーか！」

その後なぜか始まった二人の乱闘に教室に流れ出していた不穏な空気は取り払われたのであった。

「ここがいかしらね」

不意に聞こえた夕香の声に表麻はあたりを見渡す、随分と学園から離れ、着いた場所は町から離れた河川敷、野球が出来そうなくらいの大きな場所である、太陽は沈み始め、遠くのビルの隙間から夕日がさしているのが見える。

少しばかり距離をとった夕香に表麻は少し声を大きくして問いかける。

「何でこんなところに来たんだよ？」

「あんたを更生させるためよ」

間髪いれずそんなことを言われた表麻は。

「いきなりクレイジーな発言だなお前、俺は別に更生させられるほどの問題児でもないだろ？」

「あんた、それで自分が問題児じゃないとも思っているわけ」

夕香の目が鋭くなるのを見て表麻はあきらめたように肩の力を抜く。

「まあいいや、俺も少しばかり聞きたいことがあってよ……何であの時俺のことで怒ったりしたんだ？」

それを聞いた夕香は少しうつ、と呼吸を乱したが、すぐに利峰のやつねと暗いオーラを放ち始める、おーい、聞いてるか？ という表麻の言葉で夕香はハッとわれに返ると。

「別に……単に気に食わなかったのよ、人の悪口言う奴らが」

髪をいじり始めた夕香が言う。

「そうか、俺も気にしてないから言わせとけよ、俺なんか庇ったって意味無いぞ？」

「か、庇ったわけじゃないわよ！ それに、あんた悔しくないの？ あんたの悪口はクラス以外でも言われてるのよ？」

表麻はすでに知っている、下位授業サボり学園の底辺と様々な悪口、影口を何度か表麻は耳にしているが、逐一気にしては埒が明かない、言わせておけばいいのだ。

「悔しいって言われてもなあ……実際今はそうだし、どうしようもねーっ」

表麻の言葉が途中で止まる、表麻の顔面スレスレに何かがある、すごい勢いで過ぎ去ったため、その何かに表麻の残りの言葉は持つていかれたのだ。

次を感じたのは頬を伝う生ぬるいもの、まさかと表麻は少し触ってみる、妙に人肌のぬくもりと妙な粘りのあるそれは、血であった。ものすごい勢いで先ほど過ぎ去った物を目で追いかける、少し先にある鉄橋にあと少しで消える太陽の光を否に反射する……氷の杭、それは先が鋭く、人の体に簡単に穴が開くほどの鋭利さを誇るであろう。

「あんたねえ」

表麻はビクリと肩を震わせると、ギギギとまるで油の足りていない口ボットのようになぎこちなく首を夕香の方へと向ける。

「あの、夕香さん？ これはいったいどの様な過程をたどって殺人行為へと暴走しようと思ったのでしょうか？」

「言ったわよね、更生させるって、少しでもあんたが馬鹿にされないよう、今からあたしが鍛えなおしてやる！」

「本人の意見は無視！？ え、ちよつと待って！ そんなもの飛ばしたら俺死んじゃうって！」

夕香の手に鋭い氷の杭が形成される、表麻は早くも逃げ腰に移行

するが。

「当たったら病院に運んであげるわ、安心しなさい」

「人体にはあたってはいけない場所があるの知っていますかあなたは!?」

「じゃあ特異能力を使って防いで見なさいよ！」

そういうや否や氷の杭を夕香は思い切り表麻に向かって槍投げのように投げつける、真正正銘の殺気を表麻は感じて、彼は情けない声を上げながら地面スレスレにしゃがみこんで来る一撃を回避した、氷の杭の軌道に乗って風が吹き抜ける、表麻の顔に見える汗のしずくは暑さだけではないであろう。

「うおい!? 今の完全に顔面コース! 風穴開ける気か!」

「少しはマシな顔にしてやろうと思っただけよ」

「……いやいやいやいや」

表麻の中で彼女の攻撃を殺人と断定し、背を向けようとしたのだが、寸前で思いとどまる、彼女のことだから逃げる自分にも容赦なくあれを投げつけてくるだろうと予測したためだ、そのため表麻は踵を返さないで（返せずに）夕香を見据えた。

彼女の手には既に形成された氷の杭が握られている、太陽が落ち、夕闇の中で不気味に光るそれは表麻の恐怖をいっそう駆り立てる。

表麻では中位特異能力者の夕香に勝算など微塵もない、すでに戦うことを放棄した表麻はただ向かってくる氷の杭をよけることに専念することにした。

これでも反射神経と昔から面倒事に巻き込まれたり、友達同士の喧嘩たわむれによつて、多少は腕っ節と逃走用の足の筋肉には自信がある。

幸いなことに夕香の投げってくる氷の杭は直線上でしか猛威を振るわない、すぐに軌道を見極めてそこから離れればそれほど危惧する必要は無いのだ。

それに加えるとするならば、女の子の肩で槍投げ選手もびっくりの速度を誇る氷の杭をそう何発も投げることなど出来ないだろう、それを証明するようにすでに氷の杭の速度は落ち始めている。

「避けてばかりで特異能力は使う気ないってことね……だったら」

夕香が氷の杭を収める、その所作を見た表麻はゾクリと背筋に冷や汗が流れた、何か来そうだという無駄に感のよろしい表麻は慌てて離れている距離をさらに離す。

「逃がさないわよ！」

まだ日が落ちたばかりだと言うのに河川敷のあたりは涼しげな冷気が漂い始めていた、それは夕香の特異能力によるもの、夕香が腕を振るうと彼女を機転に地面がまるでガラスのように凍りいた、その氷はまっすぐに逃げ始めた表麻の元へと向かう、まるで獲物を見つけた蛇のように、そして、軌道を読まれないよう夕香はわざと弧を描くよう調節を計り表麻を追い詰めんとする。

「そこまでする必要を伺いたい！」

それから必死で逃げる表麻、あれに捕まったら最後、今日の二の舞を演じるように足を凍らせられるに決まっている、そうしたらもはやサンドバックは必至だ。

しかし、表麻が後ろ足で駆けるのに対し、氷の道はものすごい速度で表麻との距離を詰めてくる、あと二秒もしないうちに氷の道は表麻の足を捕まえることであろう。

「食らうかあ！」

だが、それを表麻は根性という自分にはもつとも縁の遠い筈の二文字で、それを回避しようと横に強引に飛んだ、しかしだ。

「もらった！」

夕香はそれを読んでいたらしい、常にどちらかの方向に曲げられるよう予め事前入力をしていたのかも知れない。したがって、空中にいる表麻はよけることなど出来ない、着地の瞬間、真下にある氷の湖に足を突っ込んで、ジ・エンドとなる。

「おおおらあああああ！」

が、表麻はびっくりするほどの大きな声とともに、まるで地面にダイブするような格好へと移る、そのお蔭もあってか氷が待機していないギリギリのところに両手が付き、強引にそれだけで体を引き

寄せる、普通の人ではまず出来ない、気合というか執念が表れてこそ成せる技だ。

「なんて強引な……チィ！」

夕香の表情に一層怒りの色が濃くなるのがわかる、表麻はなんか悪い事した俺！？と目に涙を浮かべながら逃げる避ける。

「この手は使いたくないけど、しょうがないわよね」

そう言う夕香は氷の道の速度を極端に落した。

人体が無意識のうちに立てる計算のことをこの世界では高次推計と言う、例えば、鼻をかんだティッシュをゴミ箱に入れるとする、その場合こういう風に投げれば入るのではないかと自然と人間の脳は推測を立てる、キャッチボールもまた叱り、特異能力を使う際も推計は重要となってくる、こうすれば良いという『推計』では無く、こうすればなるという確定を持つ高次の『推計』それが高次推計というものだ。

夕香が氷の道の速度を落としたのも、ほかの事に推計を立てるため、簡単に言えば脳を酷使しないためにわざと許容量を開けたのだ。そういう不可思議な出来事にもっとも不信感を抱く表麻は、どうすればこの茶番を終わらせられるかと試行錯誤を繰り返す。

そんなことを考えていた矢先、表麻の少し先の真上から、先のがった巨大な氷柱が降り注いできた、あまりのことに思考が追いつかない表麻は慌てて足にブレーキをかけると体を横へと向ける。

しかし、走り出そうと足を踏み出した途端、ズドンと再び目の前に氷柱が降り注ぐ、土ぼこりが舞い表麻は激しく咳き込んだ。

そして、気がついたときには左右背後は透明な氷柱によって塞がれ、残る退路は前方のみ、そこも夕香がゆっくりと歩いてきているため飛び出したら反撃（もとい攻撃はしていないため一方的な暴力）を食らうことになる。そんなことお構いなしに、夕香の手には氷の杭が握られている。

「そつえば、あたしあんたの特異能力知らないのよね、ちょうどいい機会だから見せてもらおうかしら」

「お、おい待てよ、待ってよ、待ってくださいよ、特異能力を使わない人に対してそんな物騒なもの向けるのはどうかと思うのだが」
「別に、あんたが使えば済むことでしょう？」

そういうと夕香はなんのためらいも無く氷の杭を投げる姿勢へと移る。

「じゃないとあんた、本当に死ぬわよ？」

夕香は冷徹にそして怖いほどまっすぐにその言葉を放つと、氷の杭を投げつけた。

だが、それはあくまで演技の範囲、特異能力を本当に使わないのであれば途中でその杭を消せばいいだけの話、もとより自然の摂理を無視して作り出した氷は夕香の意志一つで一秒も満たさずに水蒸気に戻るのである。

「え……？」

しかし、表麻の方へと視線を向けた夕香の唇から言葉が漏れた。いつもは適当にやり過ごすような呆けた表情は忽然と消え、見たことの無いような真剣な眼差しがそこにはあった。

瞬間彼女と意思とはまったく別に、恐ろしい速度で向かう氷の杭は表麻の数歩手前でガラスのように弾け飛んだ。

「うそ」

彼女はわけのわからない現象に言葉を呑んだ、氷の解除はしていない、だが、氷の杭は見えない壁のようなもので防がれた。

しかもだ、表麻は下位の特異能力者であるのに対し、自分は中位、普通の攻撃が防がれること自体可笑しい。

と、ゆっくりと歩きながらこちらに近づいてきた表麻が面倒くさそうに頭を掻きながら、ため息をつく。

「……はあ、これで良いかよ？ 特異能力は使ったぞ」

「今のは何よ？ あんたの周りに何の変化も無かったみたいけど」

「あー…… 黙秘権を行使」

「だいたい、私は中位特異能力者なのにあんたは何で防げたわけ？」
「黙秘権を行使」

「ッ！ あんた、本当に下位の特異能力者なわけ？」

「黙秘権をこう」

「っざけんなー！ まじめに答える！」

夕香が叫んだ途端、表麻の上空から氷の氷柱が数本出現、それらは重力に従って、表麻の元へと降り注ぐ。

「うおおおおおおお！！！」

ある程度自分の態度で襲撃を予測していた表麻は身を翻すと全力で攻撃の範囲から脱出、そのまま受身の姿勢をとると即座に立ち上がる。

「もう良いだろうが！ お前が望んだとおりに特異能力を使っただのに、何で俺は攻撃をされなければならないんだよ！」

「うっさい馬鹿！ あんたの特異能力が何なのか吐くまで今日は終わらせる気はなくなった……いつ！」

氷の杭を握ろうと伸ばした腕が、激痛を訴えた頭へと伸びる、そのまま平衡感覚を失った夕香は地面にひざを付いた。

「あつ、おい！ 大丈夫か？」

「たいしたこと無いわよ、少しはしゃぎ過ぎただけ」

ふらふらとした足取りで夕香は立ち上がる。

特異能力を使用するには脳を百数パーセント以上の力を行使しなくてはならない、集中力、高次推計、あらゆる五感の情報処理も当然行われている脳に大きな労力を使わせているため、限界が来ると酷い頭痛と吐き気、平衡感覚の一時的麻痺などが初期症状として起こる、そこまでなら特異能力の使用を中断すれば大事には至らないが、それを無視して能力を使用視した際、脳の制御が利かなくなり人体を傷つけ、吐血や筋繊維の断絶、脳の神経回路が焼ききれ、最後には廃人となる。

そこまで能力を使用する人はほとんどいない、稀に特異能力の暴走が原因で廃人となってしまう者もいる、未だに特異能力と脳の関係について曖昧なところが在るのも事実なのだ。

「ったく、面倒くさいこと押し付けしないでくれ……よっと」

「あつ、ちよつと！」

表麻はまだ安定しない夕香の腕を自分の肩へとまわす、真っ白な夕香の腕が触れて表麻は少し自分の行動をおかしいのではないかと自問自答するが、夕香が気にしていないことを確認すると、自分も気にしないように注意を払って帰路へと付く。

すでに街は夕闇に飲まれ、遠くからでは輪郭が浮き上がっているのが確認できる程度のものでしなくなっている、夕香は少しばかり顔を背けたまま、ボソリと呟いた。

「あんた、本当は下位なんかじゃないんでしょう？」

呟いた言葉には確信を得たような強さが含まれている、先の戦闘が正しい判断材料となってしまうたようである。

「……………」

表麻は口を開かない、また黙秘権？ と近距離で夕香が睨むと表麻は困ったように顔を顰め

「夕香はさ、特異能力についてどう思う？」

唐突にそんなことを口にした。

「なによ急に？」

「いや、そんな深い意味は無いんだけど」

「そうね……まあ便利だとは思っわよ、私の夢を叶えてくれるかもしれないし」

遠くを見るように掲げた手を眺める夕香。

「夢？」

「そつ、ゲートキーパー門番になるのがあたしの夢、悪を挫き弱きものを助ける、カッコいいでしょ？」

「は……………その弱きものに氷をぶつけてくるお前は何なんだよ」

「あれは更生での躰だから良いの、で？ あんたはどう思ってるわけ？」

質問を返された表麻は暫く空を眺める、一番星が輝き始めていた、光害のせいで見えなかったと言われている星空も、科学技術の進歩により、上空に光を漏らさない『シャットダウン屈折発光灯』と呼ばれる光を下だ

けに反射させる蛍光灯が開発されたため、後ほんの数分で夜空は星がたくさん瞬くだろう。

「いらねえって思ってるよ」

表麻は少し悲しそうに目を細める。

「そう、どうして？」

反論もせずただただ促すように夕香は聞いた。

「こんな能力があるから争いが生まれるって思うと、どうも好きになれなくてさ、力を持つには責任がいる、俺はそんな責任を背負えるほどの男じゃない……けど」

表麻は夕香のほうを見る。

「持ちこたったもんは仕方がねーから、もう諦めてるんだよ、嫌々な」

表麻はこの特異能力について不愉快には感じているし、無くなれば良いと思っている、だが、すでに彼の中では結論が出ていた、持ってしまったものは仕方が無い、しかし、せめてそれが争いを生まないようにと考慮した結果、本能的に自己回避能力といっても良い、それが働き、サボリという形で出てきてしまっているのだ。

「ふーん、そう」

それを聞いた夕香は表麻かたを外して少し先を駆けると、クルリと振り向いた。

「でも、それがサボっていい理由にはならないから、良いわね？」

「……はあー、わーったよ」

表麻は肩を落として今日何度目かわからないため息をつく、今日は色々起こりすぎて疲れたと表麻は愚痴った。

しかし、その表情はどこか微笑ましかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738p/>

平和のタクトと怠慢青年

2010年12月11日18時55分発行